

「まーすけーい歌」の記憶を共有する —パブリック・ヒューマニティーズの視点から考える歌の継承—

呉屋 淳子（沖縄県立芸術大学）

発表者は、2019年度より、文化庁の「大学における文化芸術推進事業」の助成を得て、「今を生きる人々と育む地域芸能の未来——『保存』から『持続可能性』への転換を志向する場の形成と人材育成」というプロジェクトを実施している。本発表では、このプロジェクトで実施した「まーすけーい歌」という伝承歌に関する活動事例をもとに、パブリック・ヒューマニティーズの枠組みを参照しながら、地域社会と研究者、あるいはアーティストとが協働しながら、地域の無形文化遺産の継承をめぐって「共に」考え、実践を行う活動の可能性と課題について報告する。

「まーすけーい歌」（塩換え歌）は、沖縄県の読谷村長浜地区に伝わる歌である。「まーす」とは沖縄の言葉で「塩」の意味、「けーい」は「換え」の音が変化したもので、読谷村内では、別名「長浜口説」として知られている。歌の内容は、かつて長浜の若い女性たちが東海岸の泡瀬の塩田まで、片道20km近い道のりを歩いて、薪や農作物と塩を交換した「塩の道」の様子を歌った道行歌で、「上り口説」の旋律にのせて歌われる。この歌に関する文献的な記録は乏しく、長浜地区ではほぼ口承で歌い継がれてきたと考えられる。研究資料としては、読谷村史第4巻『読谷の民俗 上』の第5章「交通・通信・宿泊」に断片的な記述があるほか、『沖縄の民謡——緊急民謡調査』（沖縄県文化財調査報告書 第47集）に歌詞が採録されている。緊急民謡調査が行われた1980年代初頭の段階では、集落でほとんど歌われていなかつたことが記録されている。

発表者のプロジェクトでは、リサーチ=ベースド・アート／アート=ベイストド・リサーチの考え方を援用し、「まーすけーい歌」によるアーティスト・イン・レジデンス・プログラムを実施した。2019年度と2020年度に、読谷村史編集室の協力のもと、アーティストたちと地域住民との交流を行い、歌に歌われる道のりを歩き、歌の原風景を探る調査を行った。また、長浜地区出身の琉球古典音楽家、長浜真勇氏には、貴重な一次資料に基づき、歌詞の由来や歌唱法に関する聞き取り調査も実施した。以上の調査をベースに、2019年度には「まーすけーい歌」の復活上演を行うイベントを開催し、2020年度には自治体と大学の共催による地域住民向けの講座と、地域の子供たちとの共同制作による影絵人形劇版「まーすけーい歌」のオンライン配信を行った。それは、芸術的な体験を通じて、「まーすけーい歌」の記憶を共有するという体験の創出でもあった。

研究者である発表者と自治体の村史編集室、アーティストたち、そして地区の自治会の4者の協働による2年間のプロジェクトを通じて、地域住民は一度継承の途絶えた「まーすけーい歌」を再び「自分たちの地域の歌」として歌いはじめている。アーティスティックな研究調査という枠組みが、旧来の学術的手法による閉じられた一方向的な記録・保存の営みを乗り越え、歌の再発見という出来事の芸術表現の手段を通じた「共事」（小松 2021）により、地域住民による歌の継承の再開という事態を招來したことは、「パブリック（公共性）」を志向する人文学、つまりパブリック・ヒューマニティーズとも方向性を同一にするものと言える。と同時に、立場の異なる者同士の協働は、ときとして当事者たちに様々な葛藤を生み出すものもある。本発表では、プロジェクトを通じた発表者自身の経験をベースにしながら、地域社会における公共的な価値創造に寄与する民俗学の可能性と、その倫理的な課題について考察を行う。